

玉の原石は どんな石？

水晶



石英と呼ばれる無色透明の鉱物の結晶です。若干の不純物の混じり具合により、黒水晶や紫水晶と呼ばれるものがあります。比較的手に入れやすい石です。

碧玉



不透明で緑色をした石です。花仙山の碧玉は、約一五〇〇万年前に地下から噴出した溶岩が固まったときに、脈状にできた鉱物です。ほかの地方でも碧玉はありますが、花仙山の碧玉が産出量も多く、ことも有名で、別名「出雲石」と呼ばれています。

メノウ



半透明の赤っぽい色をした石で、碧玉と同様、花仙山からたくさん採れます。実は碧玉とは化学成分はほとんど変わりませんが、ただ不純物としての鉄の成分の差により、赤だったり緑だったりするのです。

滑石



白色または緑灰色をした軟らかい石で、加工しやすいことから古墳時代の中ころに利用されました。左の写真の子持ち勾玉の石材には、この滑石が多く見られます。

玉の材料をさぐる 赤・青・緑とさまざまな輝きを放ち、現代のわれわれをも魅了させる美しい玉。その玉は身近に落ちていた石を磨けばできるというものはありません。いったいどんな所で採ったどんな石からできているのでしょうか。

管玉

円筒形で、文字どおり管のようの中が貫通しており、勾玉と並んでもっともポピュラーな玉。通常、他の玉と組み合わせて、首飾りとして使う。



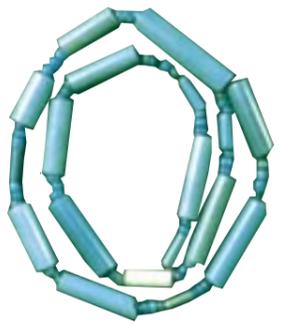
水晶製管玉 (松江市・菅田丘古墳出土：5世紀)

勾玉

湾曲した形をした玉で、一端には穴があけてある。時代や地域によって、碧玉やメノウ、水晶などいろいろな石を使っている。なかには大きな勾玉に小さな勾玉がついた、子持ち勾玉と呼ばれる変わった玉もある。



水晶製勾玉 (松江市・月廻古墳出土：5世紀)



碧玉製管玉 (安来市・造山3号墳出土：4世紀)



碧玉製勾玉 (松江市・釜代古墳出土：4世紀)



メノウ製勾玉 (東出雲町・島田池遺跡出土：7世紀)



滑石製白玉 (松江市・二名留古墳出土：5世紀)



滑石製子持ち勾玉 (松江市・二名留古墳出土：5世紀)

三輪玉

主に首飾りとして使われたほかの玉と違い、刀の柄の飾りに使われた玉。丸い中央部の両側に突起がついた形をしている。



水晶製三輪玉 (東出雲町・島田池遺跡出土：7世紀)

平玉

暮石のように扁平な形をした玉。水晶製のものが多く、平安時代まで見られる。



水晶製平玉 (玉湯町・出雲玉作跡出土：平安時代)

切子玉

横から見ると六角形の形をしている。多面体の玉。水晶製のものが一般的で、古墳時代後期によく見られる。



水晶製切子玉 (東出雲町・島田池遺跡出土：7世紀)



玉作山。郡家の西南二十里なり。社あり。(出雲国風土記)

「宝の山」花仙山

石と古代人の出会い

左の写真は、花仙山付近で近年道路工事をしたときに現れた地層の断面です。土の中に、緑色をした碧玉が見えます。花仙山は、安山岩という溶岩が固まってできた山ですが、長い年月のうちに地表に近い部分は風化して、土になってしまっています。ところが溶岩が地下から噴出したときに脈状に固まってきた碧玉は、風化に強いことからそのまま残りました。これが川べりなどで露出しているのを古代人が目をつけ、利用し始めたと考えられています。



出ていく玉・入ってくる玉

全国のおちこちから玉類が出土していますが、その産地を特定することは簡単ではありません。たとえば碧玉にしても、出雲以外に北陸などの産地があり、肉眼では容易に見分けがつかえません。しかし近年、最新の機器を使った理化学的分析法により、玉を壊さずに産地が判別できるようになり、その結果、淡路島や東京、北海道などで出土した玉に、花仙山産のものがあることがわかりました。出雲の玉は、遠く北海道まで運ばれていたのです。

反対に、出雲に入ってくる玉もあります。鹿島町の奥才古墳群からは、琥珀製の玉が見つかりました。琥珀は、日本では岩手県の久慈周辺や千葉県でしか産出せず、分析の結果、やはり久慈産であることがわかりました。奥才古墳群の勾玉は、はるか「陸奥」から、長い長い旅を経て、「出雲」へたどり着いた玉だったのでした。

